

# 日蓮大聖人の教義を否定する 『御肉牙』なる物を否定する

廣 田 頼 道

どういう理由か、いつからかも分らず、そして日蓮大聖人の法門の裏付もないまま、大石寺の御宝蔵には『御肉牙』というものが収納されている。

私達が小僧の時から聞かされた『御肉牙』の話とは、日蓮大聖人が御在世の時、歯が抜けて、その歯に肉片が付いていて、全世界の人が日蓮正宗の信仰をするようになる広宣流布の時点でその肉がどんどん増えて行き、歯を全部つまみこむのである。もう半分位肉がおおって来ている。

このように聞かされ、私は、日蓮大聖人の教えが正しいならば、そんな考えられない奇跡が、日蓮大聖人だけは特別に通ってしまうんだと思ひ込んでいた。しかし、その時点で『御肉牙』を見たことはもちろんなかった。私は御宝蔵の掃除当番になる度に、まだ見ぬ『御肉牙』が自分の心臓と同じように血が流れ脈打っている姿を頭に浮かべていた。

小僧の時は分らなかつたが、この『御肉牙』がまるで秘仏の様に、本尊よりも大切で貴重なものの様に扱われ、貫主の代が替る「代替り法要」の時になると、一般に開帳（公開）され、参詣僧俗の合掌唱題のもとに拜まれるのである。

私は昭和三十八年（一九六三）日蓮上人を師匠として出家した為に、永く代替りは無く、この『御肉牙』をどの様に扱うのか見聞したのは、日蓮上人亡き後の不正な日頭上人（本名阿部信雄）の代替法要の時が最初で最後だった。

大講堂大広間の一段高くなっている北側（御本尊側）に、久保川法章師を中心に、法臘の古い方が、十人前後、真横一例に並んで題目を唱え、私達僧俗は大広間西の下手横の入口から合掌唱題し乍、『御肉牙』の方へ近付き乍U字形の順路を取って、全体が宝塔形で胴の部分が透明なガラスになっている器物の中にあるであろう『御肉牙』なるものに、三メートルか五メートル迄近付くのであるが歩行し乍ら、合掌唱題で順行し通り過ぎるのであり、むこうは歯一本であるわけだから、何が何んだかわからないのであります。

私はまじまじと手に取らせてくれて、見せてもらえな

かつたから不満を持っているということも無いし、そんなことを望む必要もないし、又大石寺にそれを求めても応えてはくれなかつたであらうと思う。

私はあの場面に身を置いて合掌唱題をして進み乍、自分に嫌悪を抱いてしまったのであります。

これは「淫詞邪教」だと思った。

二十年たった現在でも『御肉牙』なるものは、日蓮大聖人より身も心もはるかにへだたつた者、法門のわからない者が、ただ大石寺はすごいんだ、日蓮はすごいんだと、御信者や世間に広告する為に編出し、分らない者がありがたがって、出来上り、伝えられて来たものと考えるのであります。

何故かならば、日蓮大聖人は法華身誦によって『御肉牙』なるものを秘仏の様に拝することを、末法一切衆生に示したはずではないからであります。

以下『御肉牙』がいかに仏法に外れる愚劣な物かを説明させて頂く。

旧版宗学要集十卷(298P) もっと古い(山喜房版)では第五卷宗史部(一)(319P)に

一、日蓮聖人肉附之御齒一枚

又御生骨と稱す、蓮祖の存日生齒を抜き血脈相承の證明と為て之を日興に賜ひ事の廣布の時に至らば光明を放つべきなり云々、日興より日目に相傳し代々附法の時之を譲り與ふ、一代に於て只一度代替蟲拂の尅之を開封し奉り拜見に入れしむ常途之を聞かず。

と、示されている。

この「大石寺明細誌」は、大石寺四十八世日量上人の著述で、文政六年(一八二二)五月、五十三才の時に著述されたとするもので、大石寺のまさしく縁起から塔中の配置寸法、什宝、藏書されている御書の目録、道具類、山内舊跡、末寺の住所、寺名等々、まさしく明細誌といわれるほど、ダイジェストにまとめ書かれているものである。

右にあげた、「日蓮聖人肉附之御齒一枚」は什宝の頃に示され、戒壇の本尊、日蓮聖人御影(日法作最初仏)の次にこの肉附之齒が示されるのであります。

ここで不思議な点は、この『明細誌』には私達が小僧の時から聞かされた

広宣流布の暁には肉がもり上って齒全体を包み込む。という内容がなく、

広布の時に至らば光明を放つべきなり  
となつてゐる点で、いつの時代に変質してしまつたのか  
という点である。

次にこの『明細誌』のあとがきには、仙台仏眼寺住職  
寿圓院日倚の書写本を用いて日量上人の正本がないとい  
うことが示されている。あと書き全文をここにあげる。

右謹で之を拜閲し奉し且々尊命に隨て手當甲申六十五  
歳より老眼を以て之を書寫し奉り寺寶に備ふ、追日再寫  
して再冊と成すべし、其所以如何虫喰磨滅を恐る、又其  
餘は書寫を堅く之を禁ず他門に散在するを怖る敢て恪惜  
に非ず、即尊命に云く深信の者に於て之を拜見せしむ  
べしと、是即秘して之を傳ふべきの垂迹にして遠く散在  
を制する誠言なり、後哲深く之を思考せよ、若し深信來  
至して聴聞を願ふに於ては日々夜々と雖も聴聞に備ふべ  
し、是即教諭の最要一宗顯本の基源なり勵て之を務むべ  
し、然りと雖も書寫を許すべからず終に輕卒散在を成さ  
ん、既に今當門秘書世上に散在す、爾るに亦解せず信せ  
ず還て謗の助と成る此意深く之を思量せよ、夫今此冊や  
御本傳廣博なりと雖も然も畧して要を取り御大事を文底  
に含め開祖御離山の元由著明高顯なり、五百有餘歳の往

昔今眼前にして御寶物舊跡掌中に觀るが如し、一宗大本  
山本門戒壇の靈場文に在て分明顯然なり、若し文上者為  
りと雖も正信を以て之を拜せば忽に前非を悔ひ文底に歸  
入すべき寶冊なり、若し又廣布の時に到りて一宗の本源  
御糺明在るに於ては先此寶冊を以て上聞に達すべき  
者か、而して後問に任せ答ふべし是併つ諸末寺に於ても  
得意最要なり、既に今権經名字過て迹門題目盛なり、  
若し爾らば本門の廣布近に在ること之を疑はん、務めよ  
や務めよや専ら修理を加え勤行を致し待ち奉るべき者な  
り爾か云ふ。

文政第七甲申歲正月十八日、法龍佛眼に於て謹で之を  
書す。

編者曰く「量師の正本を見ず一二の轉寫本に依る誤字  
多けれども強いては改めず、少しく訂正を加へ全文延べ  
と為す、又此書は先師も曾て怪竒の書と貶せられたれど  
も寫傳八方に飛びをれるより正評を加へて誤解なきやう  
努むる必要あるより、全然誤謬に属する所には傍に〇〇  
點を附し、疑義に属する分には△△點を施して、讀者の  
注意を惹かんとす、後跋の文は仙台佛眼寺の住壽圓院  
日倚の筆にして純信の文字なり。

実にこのあと書きは矛盾に満ちた内容であることが分る。

①日量上人は文政六年五月にこの『明細誌』を著述されている。それを何故一年後の文政七年五月十八日付で密命を受けたかの様子で

○其餘は書写を堅く出を禁ず他門に散在するを怖る

○尊命に云はく深信の者に於て出を拜見せしむべしと、是即秘して出を傳ふべきの垂迹にして遠く散在を制する誠言なり

○若し文上者為りと雖も正信を以て之を拜せば忽に前非を悔ひ文底に帰入すべき宝册なり、若し又廣布の時に到りて一宗の本源御糺明在るに於ては先づ此の宝册を以て上聞に達すべき者か

何を伝えたいのか伝えたくないのかがまったく分らないように書いてあります。『明細誌』の中で、塔中の寸法も歴代も末寺も秘密にしておく必要もなければ文底の甚秘でもないわけでありますから、この点が疑問であります。

②このあと書きの主語(本音)は何かと読み重ねると、

私は

五百有餘歳往昔今眼前にして御宝物舊跡業中に観るが

如し

であり、什宝の項目を色々な項目にまぶして示してあるということが良く分ります。

何故このように不明朗にする必要があるのかが疑問であります。

③日蓮大聖人の入滅が一二八二年、この『明細誌』が一八二三年、五四一年の間に一度も「肉附之齒」が出てこなかったということは疑問よりも不審としか言えない。

④堀上人も△△で疑義を表明している、戒旦本寺の記述(298P)

古傳に云はく此木浮ヒ出テ甲州七面山之池上ニ夜々放ツ光明ヲ

等の表現も、特別に不思議なるありがた味をわざと付け加えようとしているのみで、まったく大聖人の法門とかけ離れたことと疑問を持つ。

⑤京都要法寺の玉野日志は明治八年六月十三日付の飯能本門社刊行「大石寺明細誌の批判」において

日蓮聖人肉附の御齒

一枚

又御生骨と称す。蓮祖存する日、生齒を抜て血脉相承の証明と爲し之を日興に賜ふ。事の広布の時、至れば光

明を放つ可し云々。日興より日目に相伝し代々附法の時、之を授与す。一代に於て只一度代替虫弘の尅、之を開封し奉り拜見に入らしむ。常途は之を開かず。

智伝日志評して云く。奇なる哉、怪しい哉。昔両山（京都要法寺、上野大石寺）通用の節は曾て此の説あることなし。文政年間（「大石寺明細誌」文政六年）に至りて、彼の眞濟等が奇怪の説を以て弘法（高野山）が徳を魔飾し以て愚民を眩惑せしむるに習つて、かゝる奇怪の説を設けたるか。道心あらん者は仏祖の照覚を恥べきなり。

日精家中抄に云く。伊勢法印と問答し玉う時も一両句にて閉口致させたるも此の相伝（早勝問答十箇條）の故なり。其の頃、御牙齒脱落す。聖人此の齒を以て日目に授け我に似り問答能くせよとて玉はりける御肉付の御齒と申すは是也（此の齒当山靈宝の隨一也、広宣流布の日放光し給う可しと云えり）。大聖人の一紙の血脉を以て日目に下さるる其文に云く。日興に物書かゝせ日目に問答させ、又外に弟子ほしやと思はず小日蓮、小日蓮、云云已上矣。此の文の如くならば蓮祖も亦同凡夫の日は既に病に沈み玉うこともあれば左あることもあるやに思はるれども附言して、流布の日放光し玉うべしと云う。未

審し。唯虚実を祭せよ、妄伝を記して愚信を取るの謂ならんか、仏法中に決して此の道理あることなしは一。

日精明に御牙齒脱落すと云う。則ち肉を離れて自然と脱けたるなり、何ぞ生齒を抜き玉うと云や、是二。又、

日精問答よくせよと日目に玉はりけると云へり。何ぞ付属の証明として日興に玉う。日興より日目に相伝すと虚談を設くるや、是三。又、仏法中に生齒を抜て付属の証明とする文証ありや、身を傷けて法を伝付する道理ありや、外典猶を身体八膚を保護するを以て孝養とす。況や五十の功德を備え六根備足せる法華の行者自ら身を傷うて法を付する道理なきをや。是四。又日精は唯靈宝の隨一と云つて、其餘を語らず、然るに今既に直に日師に授け玉へるを新に興師に授け玉うと偽説する上、代々附法の時之を譲与す。一代一度之を開封し奉る等と云へるは全く文政年間に事を巧んで愚民を惑はす策畧なるべし。実に夫れ仏法の証明となすべき靈宝ならば日師何ぞ遺状を残し玉はざるや。又日精、日道の付属有無の難を伝するに何ぞ之を挙げて証せざるや。其の代々の伝を記し血脉相承を語るに及んで何ぞ、毛端も此事を述べざるや。古来遂に伝はらざる処、知んぬ。文政年間の策畧なりと云うことを、是五。又、溺信する物の云く、流布

の日、齒一枚不足なる帝王あるべし、此の齒を以て備足せしめて蓮祖なることを知ると。又、云く。御肉、年を追て増大すと。此の三説、猶、文政年中に記せざる処なり。其の跡を追うて怪説をなすこと最も務めたり。本化、国主なることを顯はさんとして生齒を抜き玉へるや、年を追うて増大する肉を入れ齒するに至て取り捨てるや。自然微少になりて、入齒後に面門俄開の類なるや。未審又、肉身遂に朽滅するは仏家の常談。実に夫れ肉の増大することあらば天魔波旬の所業なり、若し然らば愚民を惑溺せしめて利を射んと欲する作物なるべし、是六。

かゝる奇異を説て人民を惑溺せしむる邪教に一味の説は深義によつて正理を立つる興門一派の名を穢す処なり。いかに無道念にして名利を求めばとて、かくまで奇怪を説て人を惑はすは餘りの業にあらざや。信者平心に思惟すべし。其の御肉付の齒と云い、又は御生骨と云は、死後の白骨に簡別せることばにして実には肉と云へる程の物付きまとうてあるにあらざ。現在、今日、肉を離れて自然と脱落たる齒に肉と云へる程の物付て落ちるや。肉の付て自然と脱落る道理ありや。能く此の理を明めて彼の狐狸の説に惑はさるること勿れ。

このように六項目をあげて批判している。  
又、昭和四十八年八月廿五日付本門社刊行の木下日順編著「改訂四版」『創価学会は邪教か？ やさしい入門書』の中においても

#### 御 身 骨 (肉付きの齒)

創価学会云く『富士の大石寺には「日蓮聖人肉付の御齒」という靈玉がある。その肉が生長して、齒を覆い尽くした時が、広宣流布の時である、齒の先がしこし残っているだけだから広宣流布は近い。

この靈宝は住職一代に一度だけ、住職交代の普山式の時だけしか公開しない。この御肉牙があることによつて、大石寺の教団、創価学会が、血脈相承している証拠になる。』

批判して云く『この御肉牙に関しては、大石寺は勿論北山にも、要法寺にも、西山にも、昔の文献がないのです。大石寺のいうように、日目が、ほんとうに日蓮聖人から、肉付きの齒を、いただいたのなら、その門下の、大石寺四代の日道の三師伝や、京都要法寺の日尊の記録に、何か書かれていなければならないのです。』

日目の門下の房山日郷の門流の古記録にもないのです。

しからば、この御肉牙が記録に出て来るのは、一番古いので、何時頃かという、徳川時代の初期になつてからです。

徳川の初期に、有名な家康の愛妾「お万さま」によつて、日昭門流の玉沢法華経寺（箱根）が盛大になつて、血脈相承の秘宝として、日蓮聖人の「御歯二枚」が宣伝されたので、大石寺でもそれをまねして、偽造したのではないかと思はれます。大石寺の文書で御肉牙の記載のあるのは、徳川初期、十八代日精の家中抄が一番始めではないかと思ひます。

しかも、この御肉牙は、肉が付いたまゝ、脱けたというのです。これに対して、北山本門寺の玉野日志は、画山問答に於て「人間の歯が脱ける時、肉がついて脱けるはずがない。癩病患者ではあるまいし。常識から考へても、大石寺の御肉牙は、怪しいものだ」といつています。大石寺にあるという、御肉牙は、日蓮聖人の歯でないことは、文献上からも、はつきりわかるし、又常識から、歴史的に推論しても、考えられるのです。

しからば、大石寺の歯は、何か？といふと第一、それが、はたして、人間の歯か否かといふことが問題です。

富士山麓、青木ヶ原から拾つてきた「オオカミ」の歯

か？「イノシシ」の歯か？

はたまた、癩病になつた、大石寺四代日道や、九代日有の歯が、どこかに、かくしてあつたのを、徳川初期に、あたかも日蓮聖人の御歯の如くにギマンして、ヤシの如くにインチキの見せ物にしたのかも知れません。

而もこの怪やしげな物に対して「事の広布の時至らば、光明を放つべし…云々」といつているのです。このような非常識なものに、たばらかさされている学会員が気の毒です。

大石寺では、いろいろのこじつけをして、日目と伊勢法師と問答して、日目が勝つたので、「我にあやかりて、問答よくせよといひ給ふ。……大聖人一紙の血脈を以て、日目に下さる。その文に云く「日興に物書かせ、日目に問答させて、又外に弟子欲しやと思はず。小日蓮、小日蓮、己上」と、徳川時代になつてから、いつています。日目と伊勢法師との問答は、歴史的事実であつたかも知れないが、御肉牙の存在によつて、大石寺の血脈相承を證明は出来ないのです。

日蓮上人滅後、三百年頃から、現れ出てきた御肉牙に眞実性がないからです。

しかもこの肉牙の肉が生長するというのです。わかり

やすくいえば、バクテリアによって、腐敗しつゝあるのです。御肉牙は腐っているのです。御肉によって完全に御歯が包まれても、大石寺の邪教では、広宣流布は出来ないでせう。

この様に口ぎたなくのしられ批判されているのであります。

又、昭和三十年七月廿八日発行の『創価学会批判 日蓮宗務院編算』の中でも

### 御生骨について

当山には御生骨と云ふ「日蓮上人肉付の御歯一枚」があり御生骨と云ひ貫首唯授一人の秘宝であると三十一世日因を始め、最近では大白蓮華十六号に中学生の大石寺の訪問研究の中にもそのことを述べさせてゐる。久遠述記によつていかなるものかを紹介して見やう。

#### 一、日蓮聖人肉附の御歯 一枚

又御生骨と称す、蓮祖存日、生齒をぬいて血脉相承の証明となしこれを日興に賜ふ。事の広布の時至らば光明を放つべし云々日興より日目に相伝し、代々附法之時之を譲与す。一代に於て只一度代替り虫弘の尅これを開封

し奉り拜見に入れしむ。常途にこれを開かず。

所が十八世日精の頃には齒のことはふれてゐるが血脉相承の爲に日興に与へたとか貫主一人に授けられるものだとかは云つてゐない。而もそれは日興に与へたものでなく日目に与へたものであると云つてゐるのである。即ち日目と伊勢法印と問答して勝を得たが

其比御牙齒脱落す、聖人この齒を以て日目に授け云く、

我にあやかり問答よくせよと云ひ玉はりける

御肉付の御歯と申すは是也。

此ノ御歯は当山靈宝の隨一也、広宣流布ノ日放光し給ふべしと云へり

大聖人一紙の血脉を以て日目に下さる。其文に云く、日興に物書かせ、日目に問答させ又外に弟子欲しやと思はず、小日蓮々々己上

家中抄は日目が問答するに自分にあやかつてよくするやうにと、その頃、脱けた齒を与へられたと云ふのであつて別に日興に与へたものでもなければ、血脉授与の証拠としたものでもなかつた。所が家中抄のこの文は要法寺祖師伝の紛飾であり、祖師伝は三師伝の日目伝の粉飾である。日道の日目伝によると、弘安五年の夏の始め聖人池上に入られた、其時二階伊勢入道の子息山門の学匠伊勢法師が同宿十余人若党三十余人つれて聖人に問答を掛けて来た。そこで聖人は当時廿三才の卿公日目に問答



せよと命ぜられ十重の問答が行はれ法印悉く詰つて帰つた。富木常忍、この態を聖人に報告した所「聖感あつて云く、さればこそ日蓮が見知りてこそ卿公をば出したれ」と記してゐるが日辰當時保田妙本寺にはこの事件をかざりての文書が作られてゐた。即ち

日興物書かゝせて日目に問答させて、又弟子はしやと思はず候。小日蓮々々々

月 日

日蓮在御判

と云ふものでこの一紙の文書が家中抄では聖人の歯がぬけおちたのでこれを日目に授け、自分にあやかつてよく問答せよと云はれ一緒に右に出した一文を血脉と称し、齒は広宣流布の時に光を放つなどの非常識な話をくつつけた。所が久遠述記となると、聖人御存生の頃、生齒を抜いて血脉相承の証として日興に授けたことになり日興一日目と代々付法の時に譲与するとまで發展し遂に貫主一代にたゞ一度代替りの虫払の時しか開封、拜見することが出来なくて常には絶対に開かないものに仕上げてしまつた。今では中学生の御見学にもそのやうな話をして雑誌にまで発表させてゐる。思ふに日精の頃は玉沢の妙法華寺が養珠院の庇護の下に加殿より移つて経営大いに上つたが、その宝物の中に昭師が聖人より戴いた御齒があ

り、その相伝次第も確實である爲人士の注目する所となつたのを見、日精が聖人の齒と保田妙本寺の前引書を関係づけて作りあげたものではないか。玉沢の御齒二粒は日祐が昭師より相承したもので玉沢所藏の日祐の讓状には讓状の事、として「本尊聖教並先師聖人御齒二粒御自筆の状相添へ都て御讓書の如く、其外此宗の法門、相承口決等、残す所なく法嗣日蓮に相伝せしめ畢ぬ。御遺跡の事においては日昭法印定めおかる之通末代まで相違あるべからず、仍て讓状件の如し、延文三年三月十六日、日祐花押」とある。宗全上聖部に載せられた(文保元年十一月十六日)昭師の「遺跡之事」と云ふのは日祐が記す「御遺跡の事においては日昭法印定置かるるの通」とあるものでこれには註法華經の事と聖人御齒二粒と法門相承を記し、この御齒は「御春生之時まのあたり聖人の御手より賜ふ所也、夙夜向顔の思ひをなすべし」と云はれたものであつて爾來相違なく伝承され來つたものであつた。日精は始め大石寺の最大の外護者であつた蜂須賀藩祖の夫人敬台院妙法日詔の並々ならぬ庇護を得、幕府及大石寺々々家へ種々運動の結果法詔寺より寛永十五年、石山十八世に晋んだが、後、間もなく敬台院の帰依を失ひ、わずか四年にして石山を日舜に讓つた人である。こ

の菌のことも晋山前か或は晋山後か、いづれにしても日精は大石寺の宝藏には出入し調査、研鑽してゐたであらうことは、晋山の前、寛永十二年、興師の安国論問答を宝藏で写し奥書して「右此書は富士大石寺の什宝なり。

興御眞筆を師以て書写し奉る焉維寛永十二年乙亥十月初六日 日精」(興尊集七七)とあることから推測され、従つて宝物の中にはこんなものがあればよいとか、こうしたものを作り加へなければ都合が悪からうとか云ふ考へはあつたに違ひない。日精が大石寺を追はれたのは寺務の点にあきたらぬ所を敬台院に嫌はれたと云はれてゐるが、実の所は宝物の扱ひ方が悪いと云ふので嫌はれたものと思はれる。日精にとつては同山所藏の宝物類の眞偽の程は熟知してゐることである爲に似而非靈宝などとはことさらに丁寧にすることの出来なかつたことも了解されると共に、眞実偽りのない靈宝だと信じてゐる信者からは勿体なく感ぜられ立腹したものであらうと思はれる。日精と敬台院の關係については富士要集の史料部を参照されたい。かやうにして日精は玉沢の相伝をまね、祖師伝の文を証としてかの御菌一粒の説を作り上げたものであらう。而もその妄説は後年、作者の予想だにもしなかつた日興と關係づけられ、血脉相承の証とされ遂には貫

第一人の秘宝相承品にまで發展して行つたのである。

この様に批判されているのであります。

これらの批判に対して大石寺は、不相伝の輩とか邪宗の輩というのみで、大石寺の正統性をそこに示そうと今日迄まったくしていませんのであります。

これらの批判を整理して考える上で、

①「大石寺明細誌批判」

②「創価学会は邪教か？」

③「創価学会批判」

として、重複するものをさけて何が批判の対照なのかをここに列挙したいと思う。

①「大石寺明細誌批判」

一、道理にそぐわない。

二、家中抄に自然と抜けたとされているのに「明細誌」

は何故生菌を抜いたとなるのか。

三、何故菌が付属の証明なのか、日蓮日興のものが、日興日目の相伝となるのか。

四、生菌を抜いて付属の証明とする道理があるか。

五、日精の目師に授け玉うが興師に授け玉うと改変され

ている。

目師が何故遺状を残していないのか、日量（文政年間）の策略なり。

六、溺信する者云く、広宣流布の暁に歯一枚不足なる帝王あってこの齒を以て蓮祖なることを知る。

御肉、年を追って増大する。

右の説、文政年間には記されていない。

蓮祖、未来に国主なることを証明せんとして生齒を抜いたのか。

御肉、年を追って増大するならば、歯一枚不足の所に入れる時には寸法が合わない為、肉を取り捨てるのか。

肉身は滅することが道理である。肉が増大するならば天魔波旬の所業。

肉が付いて自然に歯が抜けるはずがない。

⑧「創価学会は邪教か？」

徳川初期に有名な家康の愛妾「お万さま」によって日昭門流の玉沢法華経寺（箱根）が盛大になって血脈相承の秘伝として日蓮聖人の「御歯二枚」が宣伝されたので、大石寺でもそれをまねしたのではないか。

⑨「創価学会批判」

日精の創作である。

④⑤⑥の中で玉野日志著の④はまじめに御肉牙の矛盾点を指摘していると思える。⑤⑥は④が大筋語り尽していると考えたのか、ひやかしの様な論調と見える。けれども④⑤⑥いずれも批判をすることが主眼であって、信仰の本義に立ってこの「御肉牙」がいかにか日蓮大聖人の仏法を否定するものなのかまでは論を展開していないのであります。「御肉牙」を正統として今日も秘仏の様にありがたがり拝み、「明細誌」に記述されている通り貫主の座替法要の折に拝するという化儀伝灯を重んじているということとは、大石寺は今もこの御肉牙を信じているということなのであります。ならば明治八年に成された玉野日志の批判に大石寺信仰のあるべき姿をかけて、不相伝の輩にも相伝の輩にも分る様に、不幸な輩を導く為にも答えるべきなのであります。答えることがなければ勇氣を出して、捨てて改めるべきなのであります。

結び

日蓮大聖人の歯ぐきの肉付き歯を拝むのであれば、何故日蓮大聖人が法華経身読の生涯を送り、出世の本懐として本尊を示し残さなければいけなかったのでしょうか。

本尊を残す必要が無いこととなります。本尊と「御肉牙」はどちらが勝て劣なのか。日蓮大聖人の本懐は歯なのか、歯が一切衆生成仏に何んの意味があるのか。「御肉牙」と本尊の関係は法門上どうなるのかを明確にしなければならぬのであります。

「明細誌批判」の中にもありますが、

肉身は滅することが道理である、肉が増大するならば天魔波旬の所業である。

肉がついて自然に歯が抜けるはずがない。

日蓮大聖人並に「御肉牙」だけが道理の外にあるということであるならば示同凡夫として末法の凡夫成道の手本を示す日蓮大聖人の法門上の立場は否定されることになってしまふのであります。

私も永久歯に替わる時幾度か歯の抜ける経験があったが、肉が付いたまま抜けることはなかったし、虫歯も歯医者で無理矢理に抜かざるを得なくて抜いた時でも肉は付いていなかった。廻りの友人においても然りである。肉が付いて抜けるということは口中は血だらけということであり、

聖人此の歯を以って日目に授けて曰わく、

我に似り問答能くせよ「家中抄」(聖典653P)との言

葉を語ることは出来ない。ましてその肉が年々増してくるといふ流言も、初出の原典となる「家中抄」の  
広宣流布の日は光りを放ちたもうべし

と、まったく変質してしまっている。百歩は譲れない半歩譲ったとして、肉がもり上ったら一切衆生の成仏に何の関わりがあるのだろうか、何人の必要があるのだろうか。何んの必要も関わりも無いではないか。

本尊は信仰の志ある者には、常に公開されている。何故「御肉牙」は出世の本懐以上の秘仏扱いの

此の御歯当山靈宝随一なり「家中抄」(聖典653P)という扱いが法門上何んの意味を有するのか、意味無くして靈宝と云い随一の賞賛は無いはずである。富士門に秘仏は無いはずであろう、日蓮大聖人の法門は一切衆生成仏の法であるが故であります。

碎身の舍利でなく法身の舍利こそ大切なれと、南無妙法蓮華經の法が示されているにもかかわらず、碎身の舍利に帰り、法門を墮し、日蓮大聖人の仏法のあるべき姿を見誤らしてしまふ行為は墮獄の因を積むだけになってしまふのであります。

日蓮大聖人は「唱法華題目抄」(全16P)の中で

疑つて云く唐土の法師の中に慈恩大師は十一面観音の化身牙より光を放つ、善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の法師通を現じ徳をほどこし三昧を発得する人世に多しなんぞ権実二経を弁へて法華経を詮とせざるや、答えて云く阿竭多仙人外道は十二年の間耳の中に恒河の水をとどむ婆藪仙人は自在天となりて三目を現ず、唐土の道士の中にも張階は霧をいだし鸞巴は雲をばく第六天の魔王は仏滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の経を説くべしと見えたり通力をもて智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言の如く一向に権経を弘めて実経をつるに弘めざる法師は権経に宿習ありて実経に入らざらん者は或は魔にたばらかされて通を現ずるか、但し法門をもて邪正をただすべし利根と通力とはよるべからず。

文応元年太歳五月二十八日 日蓮花押  
庚申

この様に示され、金言として有名な

利根と通力とはよるべからず

と戒められています。

この文面中の「十一面観音」は、十一箇の顔面を具する観音であつて、正面、左、右、後、頂上と合せて十一

面を具し、その中の

右廂三面菩薩面に似て狗牙上出。

の表情を示しているのがあります。その牙が光って目立つて異様に見えるというのであります。

善導和尚云々は「新修往生傳」に嘗て佛名を称へて口に光明を出す

と示し、平安中期の念仏の空也も作られた像に口から称える念仏が阿弥陀如来になつていく様を作つたものがあるが、念仏信仰者にはまさしく善導の唱える南無阿弥陀仏の称名が口から光明を放っている様に見えたというのであります。加えて、広宣流布の暁に光るといふ言葉は、羅什三藏が亡くなつた時訳経に間違ひのない証しとして舌が焼けずに光つたという話しにもかけているのだと思ひます。

しかし、日蓮大聖人はこれ等を例に引き乍法門をもて邪正をただすべし利根と通力とはよるべからず。

と、法華経の信心のあるべき基本姿勢を明確に示しているのがあります。

「御肉牙」はあまりにも、十一面観音の化身牙より光を放つという記述に似て、作られた話であり、弘法大

仏説まことならば弘法は天魔にあらざるや、又三鈷の事殊に不審なり漢土の人の日本に來りて掘り出すとも信じがたし、已前に人をやつかわして埋みけん、いわうや弘法は日本の人かかると誑亂其の數多し此等をもつて仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。

「報恩抄」(全321P)

弘法が中国から日本へ帰国するにあたって、真言密教の祈祷に用いる仏具の三鈷を投げた所、雲間にすいこまれる様に消え、帰国後、どこに本山を定めようかとさまよい探し歩いていたら、中国で投げた三鈷が高野山から出て来たので高野山に定めたというホラ話しであります。他宗の道理無視のホラ話しは嗤い蔑み、自宗の道理無視のホラ話しは、御本仏ならばさもありなん、批判する者は不信心、不相伝の輩。では、一切衆生成仏の道標を示す宗派とはいえないのであります。出来得るかぎり、こういう類の話しをもって、日蓮大聖人の法門をありがたがらせる様なことは自己批判をして改めていかなければいけないのであります。

日蓮大聖人の齒(御肉牙)が、日蓮大聖人の御金言

利根と通力とはよるべからず

によって破折されてしまっていることを、真摯に受けとめていかなければならないのであります。

日顕師(本名阿部信雄)から次の貫主に座替りする時には、又「御肉牙」を出して、日蓮大聖人の教えを無きものにし人々に嗤われぬ様にして頂きたいものと願っています。

たとえ「御肉牙」なる物が本当に大聖人の齒であったとしても、道理に外れた奇跡話を創りあげるものではなく、ただただ大聖人の遺物(齒)として扱うだけのものではない。それ以上でもそれ以下でもなく、唱題、合掌をもって拝み、秘仏や、血脈の証として拜することは大聖人の教義を地に墮すことになってしまうのであります。